

ブレイクとその抒情詩 (3)

宝 亀 莞 爾

Blake and his Lyrical Poems (3)

Kanji Hooki

Songs of Innocence の後 5 年を経て、1794年にその続篇 **Songs of Experience** が成り、合わせて一冊本 **Songs of Innocence and of Experience** が刊行されたのであるが、この 5 年の間に **Blake** は、

The Book of Thel (1789)

The Marriage of Heaven and Hell (1790)

The French Revolution (1791)

Visions of the Daughters of Albion (1793)

The Gates of Paradise (1793)

America: A Prophecy (1793)

等相当量の詩を残している。しかし、内容的に論ずるばあい、**Songs of Innocence**の次におくべきものは、もちろん、**Songs of Experience** で、この二篇を比較対照することによって、かれの思想の変化発展を明瞭にすることが出来るのである。なぜなら、後者は **Songs of Innocence** 後に **Blake** に起った変化の径路を、最もよくあらわしているからである。

Songs of Innocence 以後の **Blake** は、子供を材料として考えるばあいでも、従来のように、純真な心からなる歓喜をおぼえること少なく、かわりに、人生の悲哀、罪惡等を先に考えた。したがって、これまでの清浄無垢な子供の精神は、嫉妬や誤解に苦しむ俗界の感情に圧倒され、嫌惡の情に支配されて、**Eden** の園に幸福な歳月を送っていたものが、いまや、他人の苦痛をわらい、他人の幸福を犠牲にしてまでも己の幸福を計ろうとする利己の世界に沈潜するのである。

The Human Abstract

Pity would be no more

If we did not make somebody poor;

And Mercy no more could be

If all were as happy as we.

And mutual fear brings peace,

Till the selfish loves increase;

Then Cruelty knits a snare,

And spreads his baits with care.

.....

.....

Soon spreads the dismal shade

Of Mystery over his head;

And the caterpillar and fly

Feed on the Mystery.

And it bears the fruit of Deceit,

Ruddy and sweet to eat;

And the raven his nest has made

In its thickest shade.

そしてわれわれは、Swinburne の次のことばを肯定せざるを得ないのである。

Under the shadow of this tree of mystery, rooted in artificial belief, all the meaner kind of devouring things take shelter and eat of the fruit of its branches; the sweet poison of false faith, painted on its outer husk with the likeness of all things noble and desirable; and in the deepest implication of barren branch and deadly leaf, the bird of death finds house and resting-place. (William Blake, pp. 120—21)

これはまさに悪魔の叫びである。悪魔の住む世界に *Paradise* のあるはずはない。百鬼夜行して、いたるところに復讐を叫び、ただ恐怖の世界のみが現出する。善に志向することを困難にし、人生はすべて利己心で支配されていることを暗示している。人間の悪徳は過去の必然から生じたもので、富者が貧者に対峙したとき、彼らは残忍になり圧制的になった。そして、その後に来たものは、狡猾と詐欺であり、宗教でさえも、弱者には振向きもせず、強者に味方するためにのみその力を用いた。そこでついにかかる事態が生じ、いまやわれわれは、愛の思想を説明するにも、お互いを警戒しつつ、用心しなければならない羽目に陥ったのである。

このように、*Songs of Experience* の調子には、*Songs of Innocence* に見ることの出来ない凄惨、陰鬱の情緒がみなぎっている。Swinburne がその格調の美しさを極力賛美している '*Earth's Answer*' は、詩人 Blake の嗟嘆の声であらう。

Farth rais'd up her head

From the darkness dread and drear.

Her light fled,

Stony dread !

And her locks cover'd with grey despair,

.....

 Break this heavy chain
 That does freeze my bones around.
 Selfish! vain!
 Eternal bane!
 That free Love with bondage bound.

そして同時に、救いを求める悲愴な叫びである。大地は、なお、自然と人との差別、法則、物的執着をもたらした嫉妬深い神の支配を免れることが出来ず、まだ覚めやらぬ眠りの中から、悲愴な叫びをあげて、ひたすら光明と自由とを求めてやまないのである。常に歓喜と光明との礼賛者であった Blake は、その歓喜と光明とは生氣、発展の源であると信じていた。したがって、その歓ばしい精神をもつ者も、不自由暗愚な夜の世界のとりことなるとは、若々しい歓喜にみちたおとめを生む由もないではないか、と嘆くのである。そして作者の語法は著しく象徴的、神秘的であり、格調は極めて簡潔かつ荘重である。

ところで、このような悲愴陰うつな情緒は、どこから生れたものであろうか。おそらく、当時、西ヨーロッパの天地を震撼させたフランス革命から来たものと思われる。Blake が Wordsworth や Shelley に先だって、革命の精神を歌ったのは、おそらくかれ生来の民主的傾向によったもので、Wordsworth がうたったと同じように、自国の主義主張に逆ってまでも、人類の自由を尊び、偏狭な愛国心を排して、広い人類愛に立脚した宏遠な愛国的精神をうたったのである。かれは大胆にも王者、僧侶を攻撃してあえて憚らず、この点において、Humanist としての Blake は Shelley にもまさるといわなければならない。アメリカの独立を主題としてうたった予言詩 America (1793) の中で、人類の自由をうたった Blake の声は、かれの思想の一斑をわれわれに知らしめるものである。

また、Blake の法則に対する考えは、かれの自由思想と同じく、かれ独得の倫理ないし哲学の基礎をなすもので、すべての法則は人間の希望や喜びを破るものであるから悪でなければならない、と考えた。かれは結婚の指環をもって、青春を結合する連鎖の表象と考え、なんらの束縛をも受けることのない徹底的な愛を求めてやまなかったのである。Songs of Experience の 'Introduction' において、あらゆる物質的、道德的、社会的圧迫に対して強い反感の叫び声をあげている。樂園を追われて以来、人間は差別、法則、物的執着のきはんのもとに黄金時代を失って、世はさながら牢獄と化し、沙漠となってしまった。この失われた純真と自由とをふたたびこの世にとり戻すことこそ、じつに、Blake が終生叫びつづけた目標であった。神の言葉にしたがって本能に生き、衝動によって動くとき、世界はまた小児のごとき純真と自由とを回復し、人びとははじめて永ごうの歓喜にひたることが出来るのだ、とかれは堅く信じていた。

したがって、かれはこの世のあらゆるものの母であり棲家である大地(すでに墮落した人間の象徴となっている)に向って、神の言葉をかたる詩人の声にきけ、致命的な昏酔よりさめよ、と呼びかけ

るのである。すでにこの詩には、Blake の難解な象徴があらわれているが、それが一面神秘的な魅力となっており、その荘重な格調とともに、Songs of Experience の詩想の基調をなしているのである。「聖なる言葉」とは人間味を排除した、近づきがたい、神性で、慈悲に対するものである。「散り散りになった光」について註釈を加えると、日をもって生命の歓喜を象徴せしめた Blake は、星をもって分裂した知識の微光とし、人生を照らすに足らぬものと考えたのである。「水づく岸辺」とは感覚的なものにおぼれて生きることである。

Hear the voice of the Bard !
Who present, past and future, sees;
Whose ears have heard
Tho Holy Word
That walk'd among the ancient trees,

Calling the lapsed soul,
And weeping in the evening dew;
That might control
The starry pole,
And fallen,fallen light renew !

'O Earth, O Earth, return !
Arise from out the dewy grass;
Night is worn,
And the morn
Rises from the slumberous mass.

'Turn away no more;
Why wilt thou turn away.
The starry floor,
The wat'ry shore,
Is giv'n thee till the break of day.'

人間の精神はすでに罪惡にそまって、もはや永遠の歓喜をうたう 予言者・詩人の声をきくことが出来ない。永遠の光、久遠の世界を遠ざかって行くわれわれのきくものは、ただ、'Earth's Answer' の悲しみの声のみである。

Songs of Experience は Blake の円熟期になったもので、その思想の傾向は多く予言的であり、その用語も一種の parable で、詩全体が、ふしぎな神秘的象徴的色彩を帯びている。けれども、この詩集は、他の予言詩のように、不明瞭なものが少なく、依然として抒情詩の美しさを備えているのである。Elton は、この詩集を、その純粹の抒情詩的詩句と、人生の真実の苦悩を叫んだ点で、ゆう

に Milton の作にも比すべきものである、と述べているが、総じて、この詩集は英国の抒情詩壇に新しい epoch を画したものと言い得るであろう。その主題をなすものは、**Songs of Innocence** と同じく、多く子供であるが、その境涯は前と全く異なり、この世の罪惡に目覺め、苦悩にみちた実人生をつぶさに歌っている。まさに **Innocence** の倒立した世界である。いろいろな世間苦をなめて来た子供を叙して Blake は、腐敗した社会の制度、あらゆる罪惡の根源を攻撃しようとしている。たとえば、'The Chimney-Sweeper' においては、親のために奴隷に売られた子供をえがき、その悲惨な運命を僧侶や王者の罪にきし、彼らをして、われわれの不幸の根源をなすものとしている。**Songs of Innocence** では、ただその悲惨な境遇を嘆くのみであったが、ここでは、それは彼らの所為であるという。天国を実現する任務を持ち、みづから天国を実現しつつありと考えている僧侶や国王は、じつこの世を不幸に陥れている、という思想である。かれの社会観の一端がうかがえる。

また、'The Little Vagabond' においては、教会に対する強い不満と極端な嫌惡の情とを示している。禁欲節制を至高の道德ないし戒律として説教し、人間性を抑圧し無視する教会に対するかれの不満である。ここにかれの教会観ないし神観、すなわち、神を善惡の両極をおおう博大な意志と見る思想が暗示的に述べられている。そして、教会と酒屋とを結びつけようとするこの小さな浮浪児の願いは、まさに **The Marriage of Heaven and Hell** の世界のものである。

But if at the Church they would give us some ale,
And a pleasant fire our souls to regale,
We'd sing and we'd pray all the livelong day,
Nor ever once wish from the Church to stray.

われわれはこの中に、かれのやや皮肉な humour さえ感じとることが出来る。

またかれは、純真な子供たちの自由と幸福を破壊するのは、その性情を無視した学校制度のためである、と叫ぶ。人間性を賛美し尊重する Blake は、むしろ不自然な教育をのろった。かれ自身は学校へ行かず、独学し、そのことを感謝さえしている。

But to go to school in a summer morn,
O! it drives al joy away;
Under a cruel eye outworn,
The little ones spend the day
In sighing and dismay.

しかし、もちろん、この'The Schoolboy' という詩において、かれは学校全体の非を鳴らしたのではなく、ただかれの時代の腐敗した学校と、野蛮な教師とを非難攻撃したと見るべきであろう。とにかく、子供の性情を拘束し損ずる教育が、人間性の完全な結実をもたらすゆえんでないことを暗示しているのである、

以上述べたように、神聖なるべき教会や学校さえも腐敗していると見た Blake の目に、一般の人

びとが墮落しつつあると見たのは、なんら怪むに足りない。‘London’の街をさ迷うと見たものは罪惡と不幸とである。精神と肉体の禁圧にたえかねて青ざめた人びとの姿はみにくく貧弱である。彼らの胸に刻まれた文字は「桎梏」である。

In every cry of every Man,
In every Infant's cry of fear,
In every voice, in every ban,
The mind-forg'd manacles I hear.

そして、煙突掃除が街をふれ歩く声は、教会に対する非難であり、兵士の死は国のけがれである。愛もまた束ばくされた時、結婚の床はひつぎとなる。かれは世俗的な結婚は愛の弔いであると思ったのであろう。じつにこの詩は、世相の邪惡悲慘な一面に目を向けた詩人の深い嗟嘆の声である。

このように Blake は、墮落しつつある人生を眺めるに至って、燃えるような悲憤の念にかられて、一時その象徴的表現法と神秘的觀察とを捨てたかのように、もっぱら社会の惡政を攻撃しようとして、これらの詩を書いたものと思われる。したがって、以上の詩は意味も比較的明瞭で、さまで神秘性の強いものではない。ただ、詩の大要が *Songs of Innocence* に比べて変化しているに過ぎない。しかしながら、かれがこのように、現実的態度に出たのは、一時的のことで、間もなくまたかれ独得の方法で人間の思想感情を追求し、人間の性情や感情とこの世の法則との争闘に思いをはせ、ふたたび象徴的なことばを用いて、神秘的夢幻の世界を描くようになっていった。

The Garden of Love

I went to the Garden of Love,
And saw what I never had seen:
A Chapel was built in the midst,
Where I used to play on the green.

.....
.....

And I saw it was filled with graves,
And tomb-stones where flowers should be;
And priests in black gowns were walking their rounds,
And binding with briars my joys and desires.

*Innocence*の少年時代が過ぎ、*Experience*によって開かれた Blake の目は、教会の説教や禁制が、いたずらに苦い純真自由な心をおさえ、衝動の神聖を傷つけ、歓喜や希望を殺している痛ましい現実を見るのである。いまや、遊びなれた花園は礼拝堂と化し、かつて花の咲き乱れたところは墓場となっている。純情と自由とをたたえ、歓喜と希望とに生きた Blake が、それを見て、長歎息する

声がこの象徴詩の中に聞えるようである。

かれはまた、全身を愛にささげた 幸福な少女を叙して、いまだ 悲哀を知らぬ 黄金時代の愛と、今の世の愛とを比べている。そして、黄金時代においては、相愛する男女が 霊光に浴し、真の幸福に浸ることが出来たが、今の世の愛は もはや真の愛ではなく、利己と嫉妬にみちた 愛でしかないと嘆くのである。この世の掟の許す愛は、ただ 利己的な愛で、人間の他の欲望も、この掟の許しがなければ決して満足することは出来ない。その満足を得られない 人間の渴仰を、‘Ah! Sun-Flower’をもって表象したものと思われる。音楽的效果のみでも 忘れられない佳作である。ひまわりは、根は地中にありながら、花は常に 太陽にむき、その歩みを追ってやまない。それはあたかも われわれの心が、肉体にしばられながらも、その肉体から離れて 永遠の自由をあこがれるにも 似ている。肉体の墓場を逃れた霊の、自由な国へのあこがれである。おそらくこれは、Blake の心情の象徴であり、かれにとって限りなく懐しいものであったに違いない。

Ah, Sun-flower! weary of time,
Who countest the steps of the sun;
Seeking after that sweet golden clime,
Where the traveller's journey is done;

Where the Youth pined away with desire,
And the pale Virgin shrouded in snow,
Arise from their graves, and aspire
Where my Sun-flower wishes to go.

このように、利己心に満ちた世界においては、人間ばかりでなく、動物までがすべて異っている。ここには、無邪気な子供と 戯れたかつての 仔羊はなく、かわりに猛虎が現れて 造物主の威容を示すのである。そして、子供の戯れ遊ぶばあいにも、時間の制限が叫ばれ、眠る時さえ心の患いが絶えないのである。人間の こうごうしい姿は、ただ、残忍性に包まれ、神の姿にさえ 利己と嫉妬の投影が見えるのである。Blake にしたがえば、その原因はことごとく腐敗した宗教、偽善的な法律、皮相な道義心、ないしは 残忍な性情に胚胎するもので、それらが人間世界に 繁茂しすぎたために、人類を照らす神の霊光がさえぎられるのである。

これまでもたびたび触れたように、Songs of Experience は Songs of Innocence と著しい対照をなす。後者は 神・善・光・喜びをうたい、前者は 悪魔・悪・暗黒・悲しみをうたう。対立する両端を詩にしているのである。Blake は無心の象徴である仔羊を、子供を配した昼の世界においてうたった ‘The Lamb’ を、Songs of Innocence におさめた。そして恐怖の象徴である虎を、夜の世界においてうたった ‘The Tiger’ を、Songs of Experience におさめた。子供には恐怖はない。それは大人のものである。昼と夜の contrast, 無心と恐怖の contrast—— この contrast の 両端を捉えて、か

れは詩にしたのである。J. Mulgan と D. M. Davin は、その共著 *An Introduction to English Literature* の中で、つぎのように述べている。適切だと思うので引用する。

The SONGS OF EXPERIENCE are the counterpart of the SONGS OF INNOCENCE. Between the two came the French Revolution, of which Blake was for a time an enthusiastic partisan. His eyes were opened to the evils and vices of a doomed world which must be transformed. The symbol of life is no longer the Lamb but the Tiger, an object of terror whose existence bears witness that not all creation is good:

Tiger! Tiger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?

In what distant deeps or skies
Burnt the fire of thine eyes?
On what wings dare he aspire?
What the hand dare seize the fire?

(p. 91)

この詩は、Blake の作品中、最もよく人口に膾炙したもので、かれの詩の大部分がまだよく知られなかった当時でさえ、この詩だけは至るところに知れわたっていたという。この永遠の絶唱は、数多い英詩の中でも最もすぐれたもののひとつで、猛虎の威容と造化の妙技とに対する深い驚嘆と賛美の念をのべることに於いて、これほど成功しているものはおそらく他にあるまいと思われる。Blake の抒情詩中最大傑作のひとつとして最も広く愛誦されている作であるが、Swinburne はこれを評して、

a poem beyond praise for its fervent beauty and vigour of music (p. 119)

と激賞している。猛虎の咆哮と爛々たるその眼光とは、何物にもまさる雄偉と壮嚴とを示し、神の威容そのものである。どこの部分も、全体と調和して発達している虎の体のあの均整美は、神がどんな手で、またどんな目をして作り給うたのであろうか。虎のあの鋭い眼光は、どんな海、どんな空に燃えていた炎であらうか。どんな翼にのって天に昇り、どんな手で天の火をつかんで来たのであろうか。また、この猛獣の生命の本源である心臓の筋をより合わせたのは、どんな肩の力であり、その技はどんな技であつたらう。そして心臓が出来上ったら、今度はどんな恐るべき手足が、虎の五体を作り上げたのだらう。その時の道具であつた槌や金床は、どんなものであつたか、またどんな炉の中で、汝の脳は作られたのか。あの死のごとき恐怖を虎に付与した手は、どんな手であつたか。ここまで、虎の部分々が作り上げられてゆく過程を、逐一具象的にのべたあと、第五節にいたり、

Blake は造物主のうえに思いをはせるのである。こうして、みごとに均整のとれた猛虎が出来上ったのを見て、天の星がその光の槍を投げ捨てて、涙で大空をうるおしたとき、造物主は快心の笑みを洩らされたことであろうか。さても、かかる恐ろしい虎を作り給う神は、また一方では、かの柔和な羊を作り給うたのである。造物主がひとたび創造のことに当たると、活殺自在、何ひとつ出来ないことはないのだ。まことに造化の妙といわねばならない。

この詩を読んだわれわれは、その奇抜な着想と簡潔な用語とは、まことにこの詩題にふさわしいものとする。白昼の虎よりも暗夜の虎の方が、はるかに物すごい。暗中にきらめく目は、造化の妙になる虎の全容を隈取りつつ、われわれのイメージに直面して迫ってくる。その目は猛虎の象徴であり、その目の源を、いく千里をへだてた深淵や天空に見出すなどは、まさに奇想天外というべきであろう。

Songs of Experience の中にある27篇の詩は、前述したように、おおむね悲哀に貫かれたものであるが、その中の2篇、すなわち 'The Little Girl Lost' と 'The Little Girl Found' とはやや趣きを異にし、その詩想においては、むしろ *Songs of Innocence* の詩篇に近いと思われる。最初、前者は *Songs of Innocence* の中に加えられたのであるが、これと組になる続篇ともいうべき後者が公にされるに及んで、*Songs of Experience* の中に収められたものである。ともに神の愛に対する作者の信仰を述べたものである。

「迷える少女」は獅子、豹、虎等の猛獣に出逢うが、これらの猛獣は、神の愛をうけて柔和な動物となり、少女を食おうとせず、かえって、これを救い出すのである。すなわち、神の愛に対する作者の信仰ないし愛の世界、すべてのもののむつみ合う理想の世界を、幻想する歌である。全世界がいつかは救われるであろうことを予言する序曲である。したがって、この2篇と違って、人生の悲哀とその暗黒面を、それほど切実に訴えたものではない。単純なことばで少女の物語をうたった点、むしろ *Songs of Innocence* の中であって 'Night,' 'On Another's Sorrow,' 'The Little Boy Found' 等と並ぶ方が適當であろう。ただ、その用語が単純ながら極めて象徴的である点、ある意味では、後年の難解な神秘的作品の先駆ともいえるであろう。じじつ、われわれはその中に、現実的抒情詩から逸脱して、まさに神秘詩人に移ろうとする Blake の姿を、たどることが出来るからである。

したがって、この2篇の解釈もまちまちで、その象徴を正確に捉えることは至難である。貧しい私見を加えるならば、おそらく *Lyca* という少女の物語を、精神的な面から叙したものであろう。

In futurity

I prophetic see

That the earth from sleep

(Grave the sentence deep)

Shall arise and seek

For her Maker meek;

And the desert wild

Become a garden mild.

ここにいう眠りは死を意味し、死はすなわち生あるものの神の国へ帰る唯一の道である。繰り返して述べたように、Blakeの考えにしたがえば、この世は束縛と暗黒の世界である。真の自由、真の光明を享受しうるのは、神の世界でなければならない。われわれは、はじめ神の世界に生れ、やがてこの世におちて来て道にふみ迷い、ふたたび神のみ手に救われるのである。

思うに、行方不明となった少女 Lyca を発見した両親の運命は、神の主宰する自由の世界に対するわれわれ人間の渴仰を、暗示したものではあるまいか。7歳のあいらしい Lyca は、暖い南国に生れ、美しい鳥の音をききつつ 処々をさ迷う中、ついに荒野に入って行方不明となる。その身边は、群り来る猛獣にかこまれ、ついに獅子のために洞窟に運ばれる。Blake はこれをいかにも realistic に描いているが、一步退いてその背後にある意味を探るとき、彼女の眠りは死の眠りに相違ないと考えられる。なぜなら、Songs of Innocence のばあいには、眠れるものの肉を貧り食うのは猛獣であるが、このばあいには、天使があらわれて、猛獣のいけにえとなったものの魂を新しい世界に運び去るときに、その天使の姿を渴仰の目をもって見上げるのは、獅子そのものであるからである。

Lyca は、7年の間、荒野ともいふべきこの世に生き、鳥の囀りをきいたが、いまや彼女に対する救済の時が来たのである。彼女の両親はわが子の行方を探し、その死を無上の不幸と 感じるのであるが、路上に一頭の獅子を見るに及んで、はじめて神の Revelation を見出すことが出来た。するとたちまち、Blake の筆は神秘の色を帯び、われわれを夢幻の世界へ誘うのである。

Oh his head a crown;

Oh his shoulders down

Flow'd his golden hair.

Gone was all their care.

'Follow me,' he said;

'Weep not for the maid;

In my palace deep

Lyca lies asleep.'

Then they followed

Where the vision led,

And saw their sleeping child

Among tigers wild.

To this day they dwell

In a lonely dell;

Nor fear the wolfish howl

Nor the lions' growl.

Lyca の両親は別として、その他の描写はすべて夢想的で、両親の行方をさえぎった獅子は、黄金のよろいを着けた天使のような姿に見える。かくして、両親と子供とはふたたび相会するのであるが、果して **Lyca** の目は覚めたであろうか。また果して、彼らは親子たることを知りえたであろうか。それに対して **Blake** は、何らの解決も与えてはいない。ただかれのふしぎな想像力によって、光明の輝く世界に引入られるのである。われわれはこの詩を読んで、不可解な謎に接する思いをするが、この印象はひとり **Songs of Experience** のばあいだけでなく、後年の作品にはいっそう強まってゆく。

なおこの2篇について、土居氏の解釈があるので、引用する。

未来において人間が本能を抑圧してかえって偽善と物欲とに墮落せる情態を脱し、冷酷な刑罰の迷信を排して、柔和な愛の神を求める時がくるであろう。その時には荒廃せる人間性は調和にみちた美の園となる。ライカはその先駆者である。両親の暖かい愛のうちに成長した彼女は感情のよろこびや悲しみに誘われるようになった。彼女は理知を眠らす程に強い青春のめざめに身心を任せようと思うが父母が心配するので躊躇している。しかし情緒の世界の支配者である月が照らすのでその情緒に身を任かす。今彼女は世間が虎獅子の如く見なしている熱情、本能に支配されている。しかし人間を害するものは禁止せられ、歪曲された本能であって、健やかな情熱は少女を害するものではない。ライカとは「光」の意味で、ウワヅワスの「ルウシ」の歌もこの詩と似ている。この思想はルッソウによって唱えられたものであって、ロマン主義の初期の詩人によってしばしば主題とされた。(ブレイク詩選, p.192)

難解といえ、さらに 'To Tirzah' を挙げなければなるまい。この名は旧約の **Song of Solomon** の中に出て来る名であるが、**Blake** にあっては、原始宗教ないし自然神の擬人化である。また、かれの後期の作品 **The Four Zoës** (1797), **Milton** (1804), **Jerusalem** (1804) 等によれば、**Tirzah** は純潔な女で、道徳的法則の擬人と考えられる。そしてこの詩は調子においても、他の詩と異っている上に、上記の **Prophetic Books** と同じ名前が用いられている点からみても、この詩集のうちで最後に書かれたものであることは明らかである。そして、そのあまりに強い象徴性のために、1800年以後の作ではあるまいかという説さえあるほどである。われわれは、永遠の世界からこの世に放たれ、五欲に悩む肉体によって心を縛られている。しかし、いつかは仮象の自然とともに亡び、現象の束縛をのがれて、永遠の世界に入らねばならない。そして第二節は、

The sexes sprung from shame and pride,

Blow'd in the morn; in evening died;

But Mercy chang'd death into sleep;

The sexes rose to work and weep.

これは、若い男女の愛の経験は、いつか愛の破綻になるが、慈悲によりその愛を死滅せしめなかったものは、あきらめ、あるいは妥協の生活にいる。これは精神の眠りである。しかし、その男女が眠りからさめ、悲哀や苦痛を分ちながら互いに勇気づけ、慰めながら労働するようになれば、愛が浄化され、よみがえるという意味であろう。われわれの母なる自然は、残酷と虚偽とをもってわれわれの肉体を作り、肉体を現実と誤信せしめた。しかしわれわれは、この自然の拘束を脱して、自由を得なければならない。キリストの死はじつにわれわれを救い、誤信から解放し、自然から永遠の世界へ甦らせてくれる力である、というのが全篇の意味だと考えられる。

「やれ打つな蠅が手をする足をする」は、この醜惡な虫にも温い心をよせた一茶の句であるが、Blake は 'The Fly' という軽妙な短唱において、この虫にこと寄せて、かれの宿命観ないし人生観をのべている。佳作のひとつに数えられている詩である。何気なく殺した蠅のことから、かれはふと生命の神秘を考える。かれは問う。永遠の秩序において、人と蠅とどれほどの差があるか、と。

Am not I

A fly like thee?

Or art not thou

A Man like me?

For I dance,

And drink, and sing,

Till some blind hand

Shall brush my wing.

そして続ける。人びとが善悪、得失を考えることをもって人生なりとし、かかる思弁を真実の力とするならば、踊り、飲み、歌いつつ天真に生きる私は蠅に近いといえよう。しかし私は、思弁に生きるみじめな人に比べて、幸福な蠅である。たとい生きていようと死んでいようと、それは問題ではない、と。

名作「田園の憂鬱」を象徴するその副題「病める薔薇」と、この作品の末尾で主人公がいくども繰り返す「おお、薔薇、汝病めり！」という言葉について、青年佐藤春夫ととの関係を、いまし明らかにしたいのであるが、作者はことばを続ける。

それは彼自身の口から出たのだ。併しそれは彼の耳には、誰か自分以外の声に聞えた。彼自身ではない何だか、彼の口に言はせたとしか思へなかった。その句は、誰かの詩の句の一句である。それを誰かが本の扉か何かに引用して居たのを、彼は覚えて居たのであろう。

ところで、かれより少し先輩に当る詩人・三木露風に、Blake の 'The Sick Rose' と全く同工異曲

ともいうべき標題も同じ「病める薔薇」という詩があり、「廃園」に収められている。

いつよりか、あはれ薔薇よ
傷つきて汝は悲しむ。

悪の虫、樹よりつたひて
わが花はおそれに戦ふ。

ああ花よ、恋の薔薇よ
若くして汝は病みたり。

これら三者の関係を、寡聞にして明確にしえないが、矢野氏によると、

ブレイクの詩が既に明治二十七年大和田建樹によって訳され、ヘルンは東大に於てブレイクを講じ、三十五年には蒲原有明の訳も出るやうになった程であるから、特に西詩に関心を寄せて居る程の者にとって、この詩人の名は相当にファミリーであり、その詩集も比較的容易に入手出来たのではあるまいか。従って年少詩作を始めて居た露風の事として、何かでこの原詩乃至その邦訳を見得たとするとすれば、彼がそれからヒントを得たと考へる事は、必ずしも牽強の沙汰とは言へないであらう。(比較文学, p. 33)

The Sick Rose

O Rose, thou art sick!
The invisible worm,
That flies in the night,
In the howling storm,

Has found out thy bed
Of crimson joy;
And his dark secret love
Does thy life destroy.

Blake のこの詩は、多くの人びとから愛好されて有名であるが、いつまでも心に残って忘れられない詩である。退廃的な愛を歌った象徴詩とも考えられ、また清純美麗な生命が、この世の悪によって傷けられてゆく悲しみを、歌ったものとも解されよう。ばらを愛の花であるとするならば、おのずからすぐ前の詩、すなわち、純真と歓喜に生きていた少年が、**Experience**に目覚めて、昔の純真と歓喜を失ってゆく次第をのべた詩 '**The Angel**' の続篇とも見られる。虫は肉体の象徴、そして経験の世界では、霊の愛は肉によって墮落する。思うに虫は経験の夜と、暴風にのみ来るからである。